

研究結果報告書

台湾漆器の発展に寄与した山中公美術工芸漆器製作所の活動に関する調査・研究

所属：聯合大学 文化観光産業学科

役職：准教授／副教授

氏名：筈 以欣

一、調査結果

台湾における漆を作る技術の伝承は、日本統治時代の末期のごく短い時間における正式な伝習にみられるのみで、その主なものは二つある。一つは1928年に設立された台中市立工芸伝習所（後に私立工芸専修学校）で、もう一つは日本の理研電化工業株式会社が1941年に新竹州（現在の新竹県）に理研株式会社を設立した。

今日の台湾漆工芸の発展に大きな影響を与えるのは、日本香川県出身の山中公である。台湾の漆工芸の父と呼ばれる山中は、「讃岐彫」と言われる四国に特有な漆工芸の技法をもっていた。東京美術学校から卒業後、地元香川の工芸学校の教員を経て、日本による台湾領有が始められた直後に台湾に渡った。そのため、早期の台湾漆工芸は「讃岐彫」という技法がメインになった。日本の影が色濃く残っていると言われても、山中氏は台湾島の風物や人びとの生活習俗など、台湾ならではの風土を反映したモチーフを活用し、「蓬萊塗」と称される漆器を創出した。1932年に山中工芸専修学校を設立し、多くの人材を育った。その中、陳火慶、王清霜及び頼高山三人は台湾漆工芸に大きな貢献を果たしていた。

王清霜と頼高山両氏は卒業後東京美術学校で漆芸を勉強して、帰国してから頼氏が自宅を改造して「台中漆文化博物館」を創立して、台湾の民間における漆工芸教育機関として大きな役割を果たしており、漆文化の創作研究と発展に大きな寄与をする。王氏は「南投県工芸研修所」（現在の「国立台湾工芸研究所」）の教務主任を勤め、多くの生徒達に「蒔絵技芸」という技術を教えていた。この二人のお陰で、漆芸が多くの若者に伝承されていて、様々なオリジナルな作品作り出してくる。

二、将来研究の課題

今回は台湾における日本の漆工芸教育を受けた世代の第一世代を中心として研究した。第二代と第三代の後継者は日本の漆芸をマネするというだけではなく、自分なりのオリジナルな作品を求めている。たとえ頼高山の息子・頼作明氏は木胎ではなく、陶胎漆器の創作のオリジナリティを見出そうとしていて、かなり研究する価値があると思う。将来には機会があれば、その課題に触れることはできたら幸いです。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

テーマ; 台湾客家における工芸発展の基礎研究-漆の例をとして

発表者; 范以欣

会議名; 2018秋季JSSD

日時; 2018.10.13

場所; 福岡市九州大学大学院芸術工学研究院

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

テーマ; 台湾客家における工芸発展の基礎研究-漆の例をとして

発表者; 范以欣

JSSD秋大会概要集

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)